

bathe - 都市に潜むスペース・オブ・ワンダー -

井上青葉



◎背景

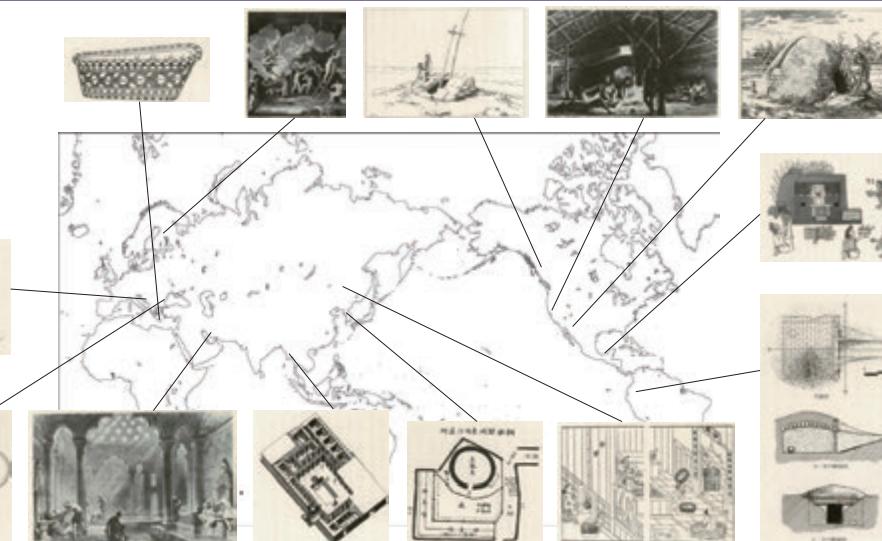


ヒトの行動には多分な意味と魅力が詰まっているように思う。しかし、日常の「行為」、たとえば「入浴」はその豊かさが失われそうになっているのではないだろうか。ヒトは何を思い「入浴」をするのか。そのためには、どのような場が求められるのか。



「入浴」が小さいところから好きで、銭湯や大衆浴場なども好きだったが、下宿での「入浴」体験に疑問を持った。「入浴」は身体衛生を管理できれば十分なわけではないならば、自分は「入浴」の何にひかれているのか。なぜヒトは「入浴」をするのか。これらの時代における「入浴」とは何をもたらすのかを考える。

◎入浴の人類史と分類



◎日本の入浴史

・石風呂（日本人の信仰の中にある「淨め」「みそぎ」の習俗、水には人を聖化する力がある）

・8世紀頃、日本に「温泉教（仏説温泉洗浴衆僧經）」が伝わる。湯を利用する入浴の功德。

→仏教の興隆とともに、温泉洗浴が僧侶の大切な勤め、寺院の大きな事業に。

・湯による宗教的な功德が施浴などを通じて、11世紀には民族が、禊・川あみなどによる沐浴から湯の世界へ

※都市の中で、大量の水と燃料が必要な「全湯浴み」をたくさん的人に施浴することは不可能

→先進地域である関西の寺院においても、「取り湯」「蒸風呂」である。

・14世紀、鎌倉から室町にかけて、京都などの都市で「風呂」「湯屋」という共同浴場が登場。

・庶民の日常的な習俗としては、長きにわたって、神道の「みそぎ」につながる行水が広く普及。

※蒸風呂系統の入浴以外で、日本に古くから知られている湯による入浴には、取り湯以外に温泉がある。

→古い時代から、温泉では、湯につかり体を洗うという入浴をしていたと思われる。

・湯気を浴室に引き込む蒸風呂が、中世末では床の上に湯を入れて湯気を立てるという半蒸気浴になる。

・17世紀頃、銭湯での入浴が、少しずつ湯量を増やすことにより「半湯浴み」から「全湯浴み」へ。

・明治初期（1870年代）、湯につかる形式によりふわしい「改良風呂」が生まれ、「蒸風呂」とは完全に異なる共同浴場が生まれる。

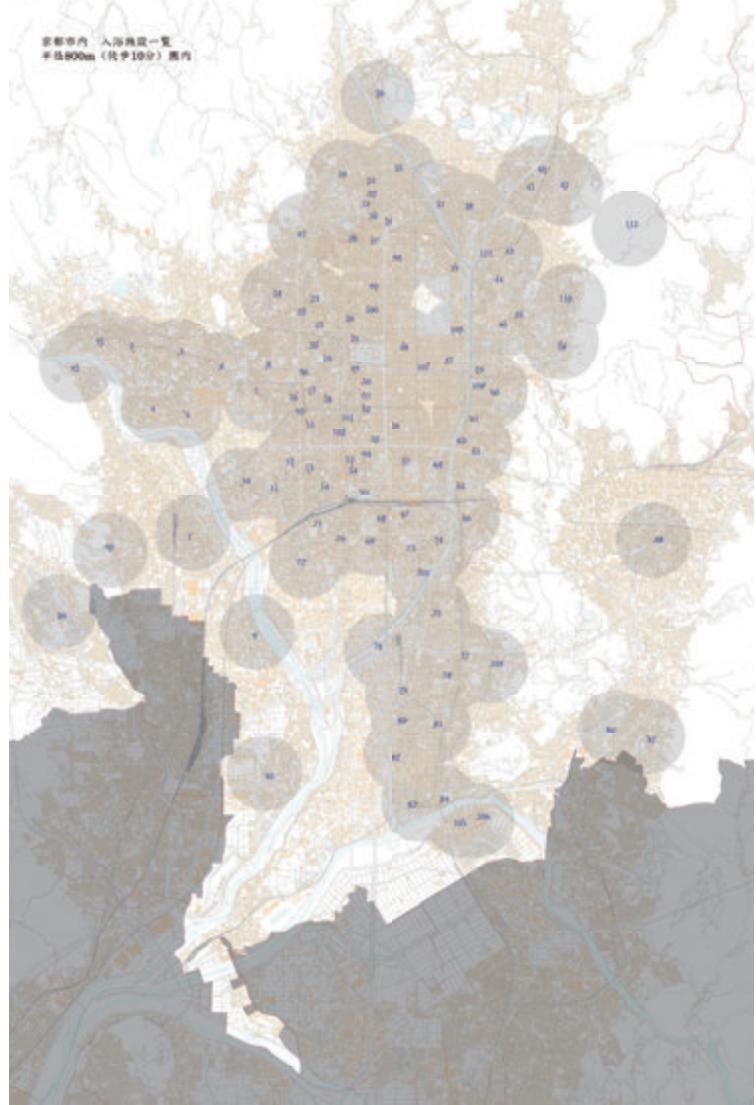
→都市の中で温泉の醍醐味を満喫する喜びを作り出した。

・高度経済成長期以後、内湯が一般化することで、自分の家の浴室で湯船につかる習慣へ。

現在において町の入浴空間である銭湯は減少、各住戸内においても様々な住空間や住宅の在り方が模索される中、入浴空間にはせいぜい窓や裏庭が設けられる程度で画一的な要素となっている。



◎京都と入浴



京都：入浴の変遷のまち

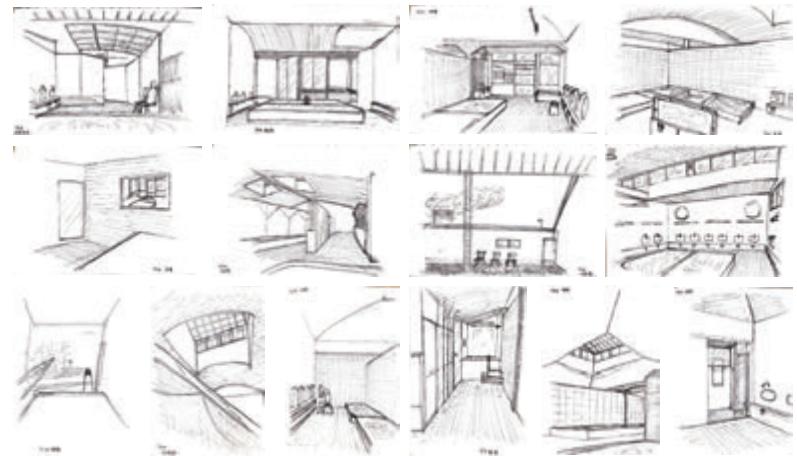
日本で入浴が行われるようになった一つの要因に仏教の「施浴」の考えがあり、一般大衆の入浴の場を設けることは寺院において大変重要視され、大湯屋とも呼ばれる大規模な浴堂が作られた。京都には古くから大衆に開かれた入浴施設があったという記録が残っており、かつて日本の中心地として栄えた京都は、時代の流れの中でその中心地として入浴の変遷をたどってきた。

現在でも、「銭湯の聖地」とも呼ばれるほど入浴の空間が町に残っている場所であり、それらを利用する人々がいる一方で、全国的な傾向と同じく年々廃業する銭湯が増え、そうした場も失われつつある。

光明皇后の施浴 施浴のようす 風呂屋形内部

調査 -research-

京都市内にある112箇所の入浴施設を巡り、入浴の体験とそのための空間のあり方をスケッチや記述で記録し、その魅力や豊かさ、そしてこれから時代にどのような意味合いを担うのかを探った。



◎計画 -4つの体验の場

四条通を一つの軸として捉え、そこにありながら普段意識されないような要素4つ、「日」、「音」、「空」、「山」を取りだし、それぞれに意識を伸ばすような入浴体験の場をそれぞれ1つずつ計画する。それら4つの要素は、その変化の時間幅が、瞬間瞬間のものから季節にわたるものまでの異なるものとして選んでいる。

以下の4か所を設計の敷地として選定した。人通りの多い四条通を中心軸として、そこでの要素をその近辺の4つの場で体験することを計画する。四条通から逸れるように歩き、なにかを肌で感じる空間へと移行していくことに始まり、それぞれが入浴空間として機能する。また、複数の場を巡る場合には四条通を経由するかたちとなり、四条通と入浴の体験を交互に積み重ね、日常での見方や感じ方の変化を促す。



◎提案

「入浴」による、日常の現象を感じるための場

-忘我体験としての「入浴」-

「入浴」の意味合い・喜びは、「身体感覺を通して、目前にあるものにゆったりと意識を移ろわしていくこと」にあるのではないか。

情報化・合理化が進む現代の都市や社会の中では、身体以上に頭を使って生活することに慣れている。こうした生活時間が増えるにつれ、モノや現象、自分そのものを肌で感じることによる、生き生きとした喜びや感激は失われてしまうのではないか。

「入浴」を、「身体感覺を高め、「現象」を感じる行為」として位置づける。

→頭（理性）で情報（意味）を理解するのではなく、肌（身体感覺）で「現象」を感じる体験の場として考える。

入浴を介して肌で「何か」を感じ、ほんやりと意識を移ろわせるような場をまちの中に計画し、日常で“見て”いないものを体験を通じて顕在化させ、それをまちの中を歩きながら積み重ねることで、日頃の“見方”を変えるような自己の内省を促すための場を計画する。

入浴：裸で水につかる、または浴びる行為。また、一時的に空気中で涼む行為。

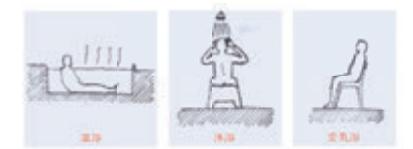
①温浴（温水浴）：湯につかること。

②沐浴：I髪やからだを洗うこと。

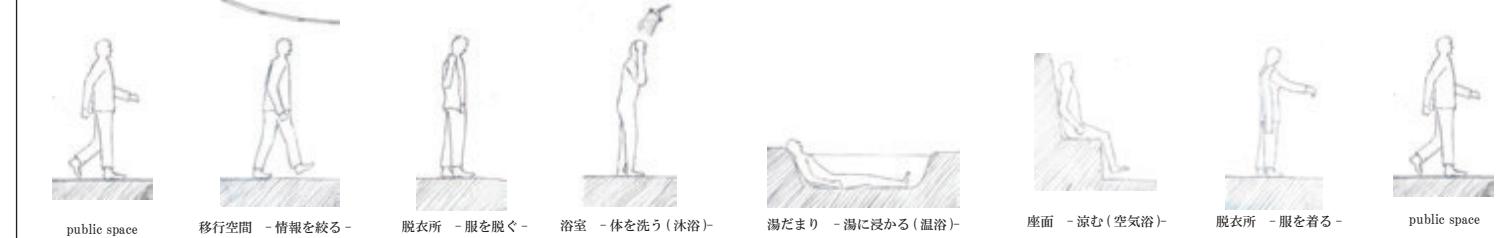
(II湯や水を浴びてからだを清めること。

宗教的儀礼としての信仰行為をさすこと。)

③空気浴：裸になって一定時間空気と接すること。



入浴の流れ



◎敷地



京都府京都市 四条通周辺

・祇園から四条烏丸まで、四条河原町交差点を中心に、京都最大の繁華街を形成。

・四条室町が鉾の辻と呼ばれて下京の中心とみなされるなど、古くから主要な通りとして京都の東西の中心軸である。

・四条烏丸交差点～四条河原町交差点間にて山鉾巡行が行われる。

・四条通の多くの場所からは、通りの先の東に東山、反対方向の西に松尾山と両端に緑の山が見え、盆地を感じさせる京都の風景が見える。

・京都市は、この四条通の車線減少を中心とした「歩くまち京都」事業を推進している。

→2012年、市の都市計画審議会で、川端通から烏丸通間は歩道を拡張し、車道を片側2車線から1車線に減少させることを決定した。

→四条繁榮会商店街振興組合が京都市に要望、京都市がこれに賛成。

提案と対象地の関係

- ・京都は歴史的に日本の中心地として「入浴」の変遷をたどってきた都市であり、現在でも「銭湯の聖地」と言われるほどその名残が残っている。
- ・京都市内においても、特に都市の発展の中心軸となる通りであり、人・モノ・情報が多く行き交う場である。
- ・「歩くまち京都」事業をはじめとする歩行中心のあり方、高さ規制等から比較的低層の建物が入り乱れるなど、人の身体要素が見られる。

◎設計の手がかり

1. 空間が層のようにして連なる



2. 上方の視線の抜け



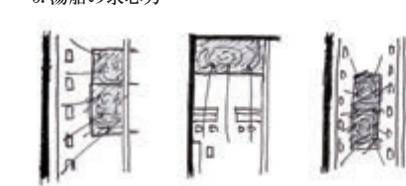
3. 浴室空間の「奥」性



4. 階段による床の垂直方向の分断



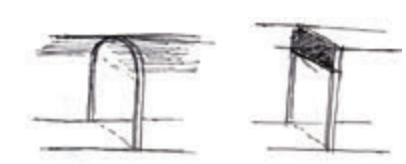
5. 湯船の求心力



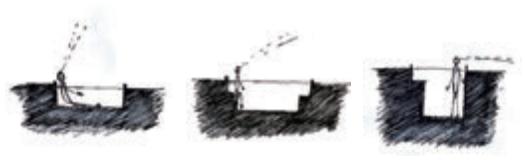
6. 天井による場の方向性



7. アーチ、垂れ壁による空間の分断

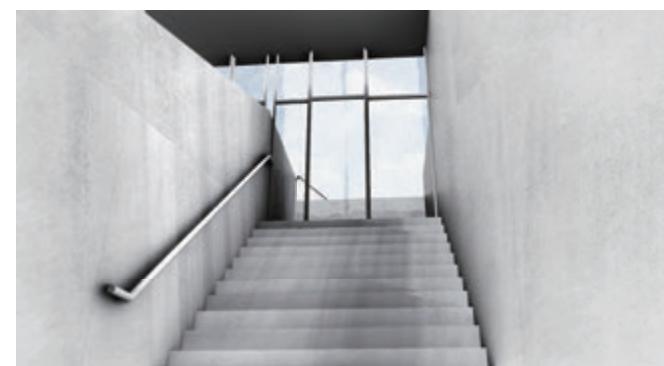


8. 湯船の深さと視線



program 1

「日」は、人の生活のリズムをつくるものである。技術革新が進む今もなお、人は昼と夜の繰り返しの中で生きている。まちを照らす日の光はそのまちを映し出すものである一方で、高層化などによって、人が差さない空間も生まれている。ここは、私たちの生活の根幹をなす、まちにあふれているはずの「日」を今一度感じなおす場所である、

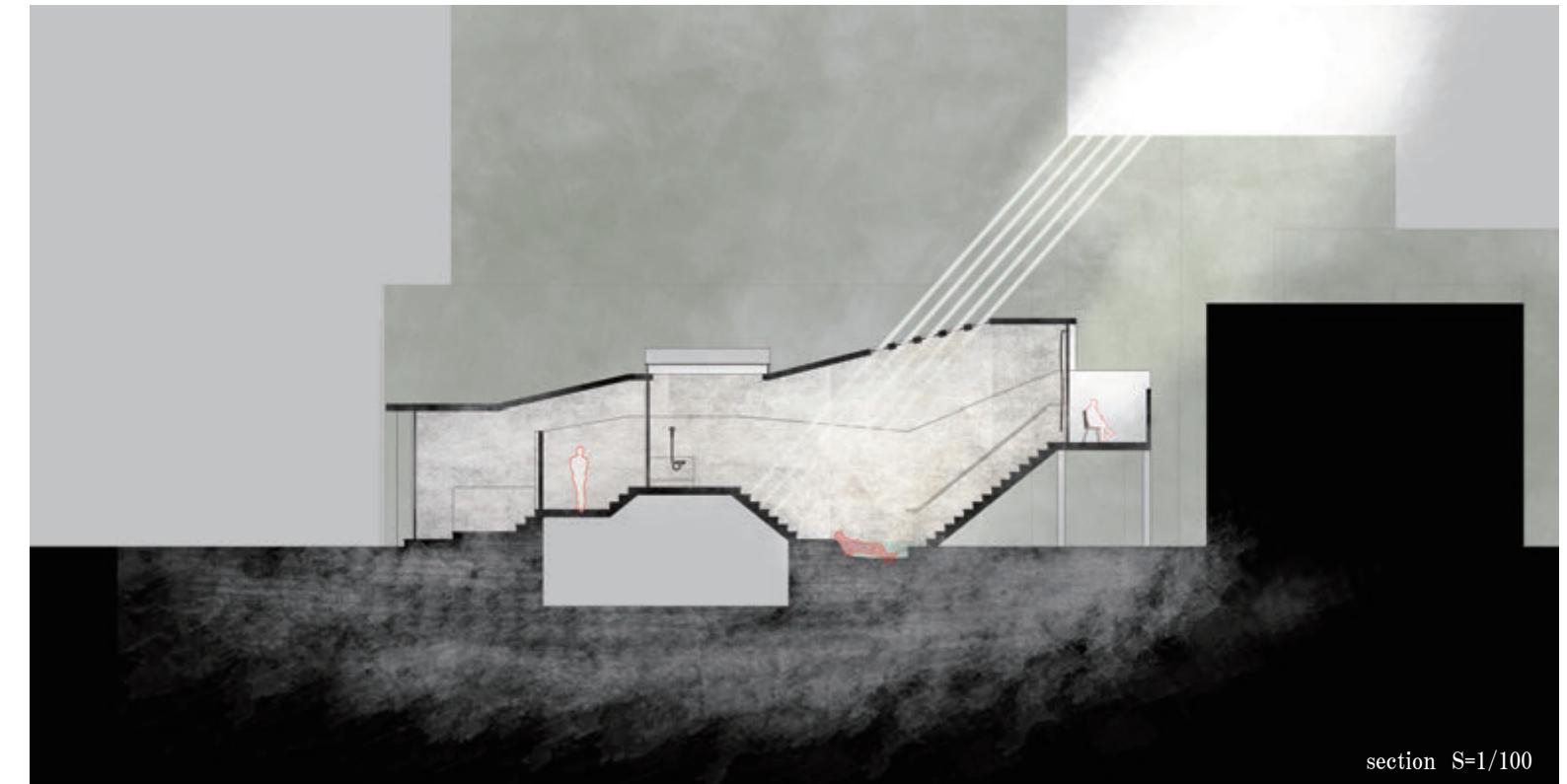


S I T E

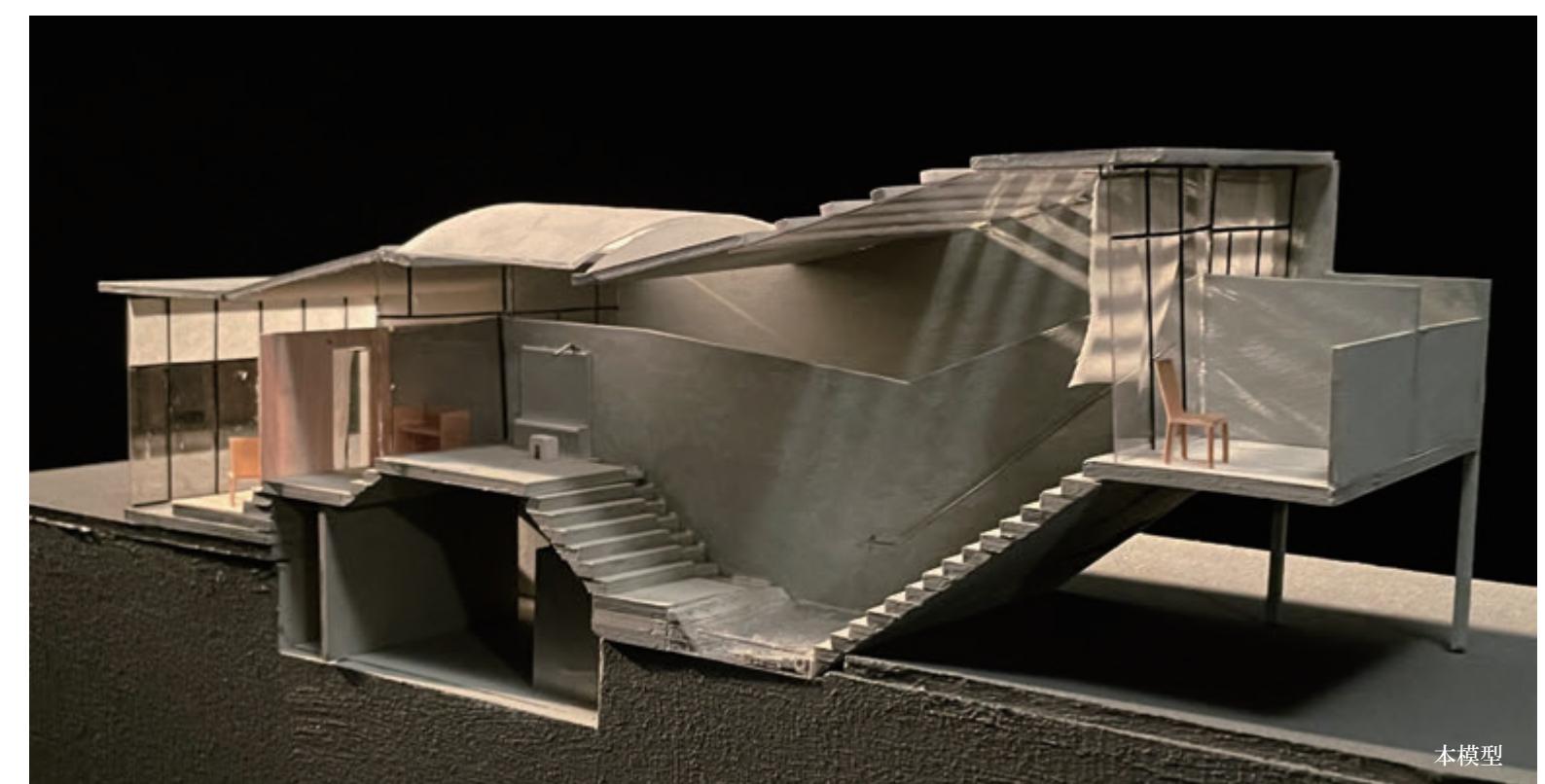


烏丸通のやや東の通りを南方向に進んだ先にある、細長い敷地。四条通から離れるにつれ高層建物の中に低層の建物が点在するようになる場所であり、敷地周辺は比較的低層な建物が並ぶ。敷地の通り側はやや高いボリュームに挟まれるも、奥に進むと空に開けた空間となる。

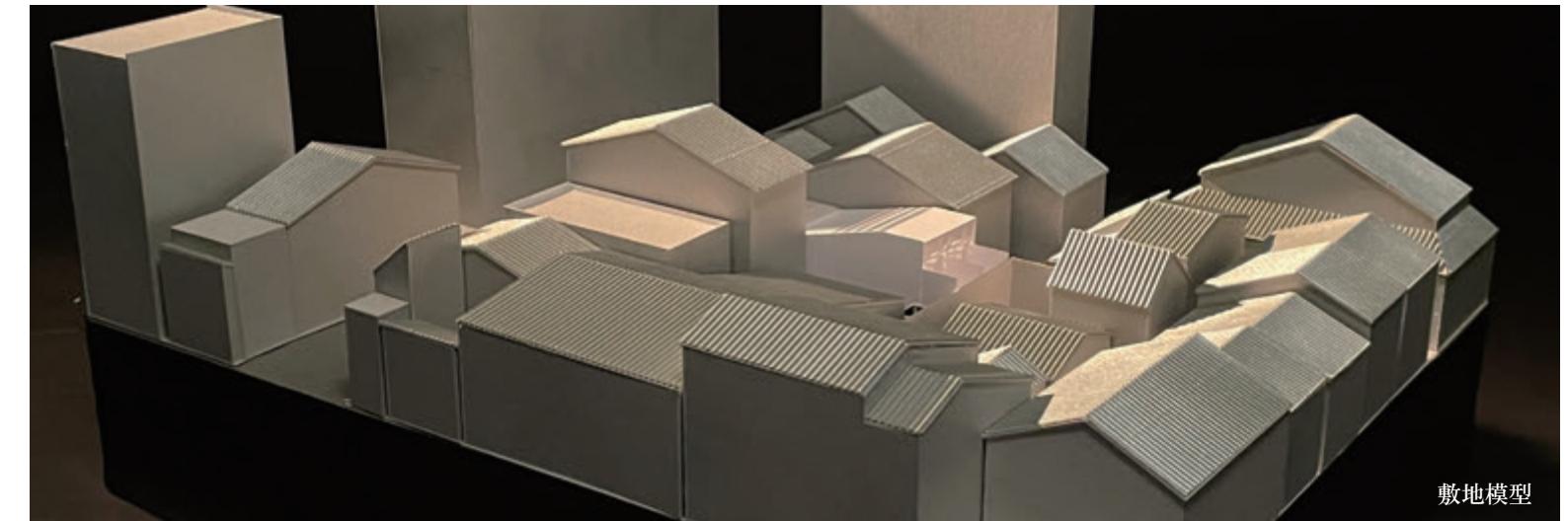
P L A N



section S=1/100



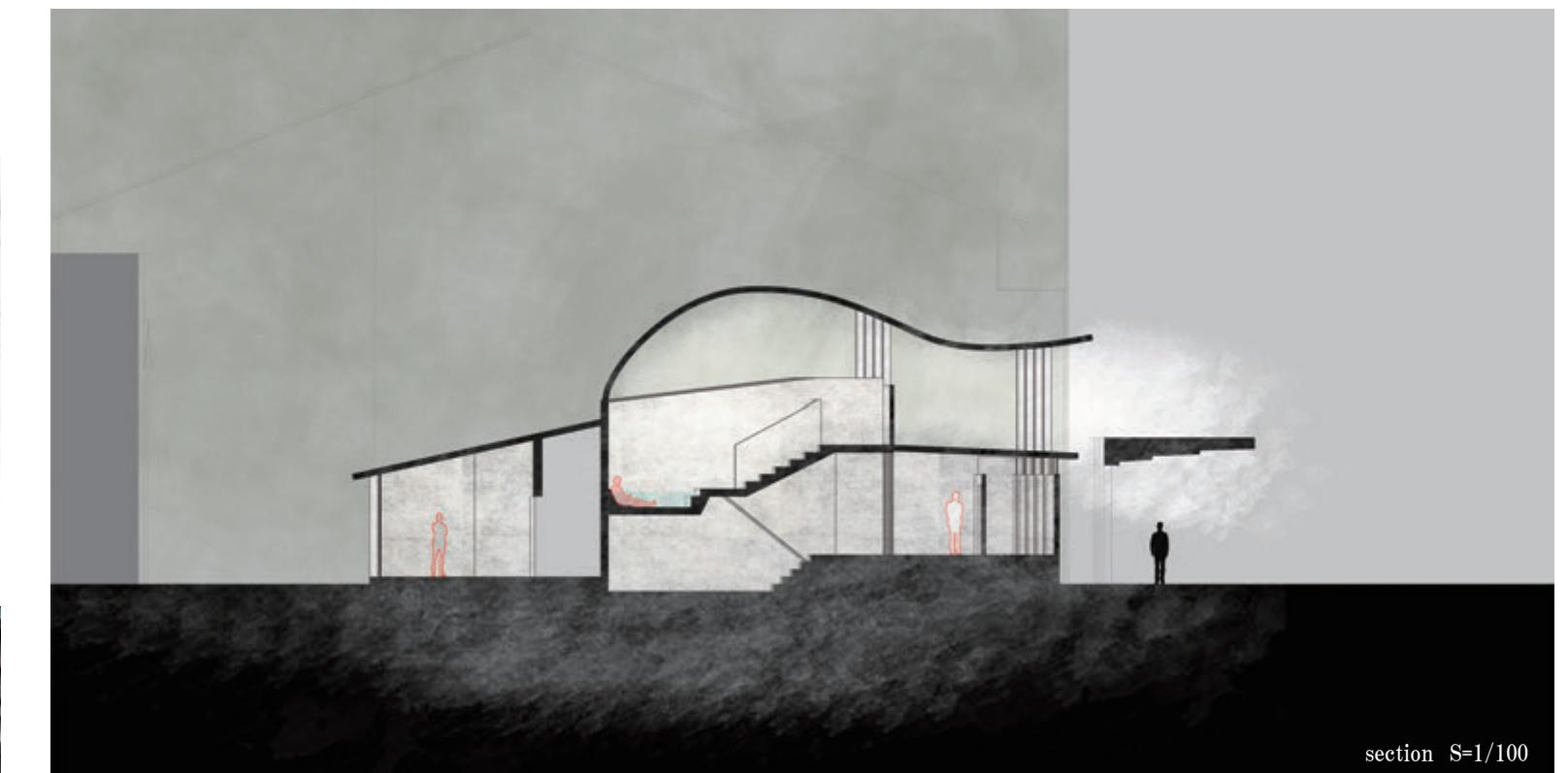
本模型



敷地模型

program 2

まちのいたるところに「音」はあふれている。しかし、認識の大部分を視覚が担う人にとって、意識は必要最低限のものにしか向けられない。人の話し声、歩く人々の足音、通り過ぎる自動車のエンジン、信号機の音。視覚を遮断して、それらに意識を向けてみると、当たり前にあった音からは別の世界が立ち上がるよう感じられる。

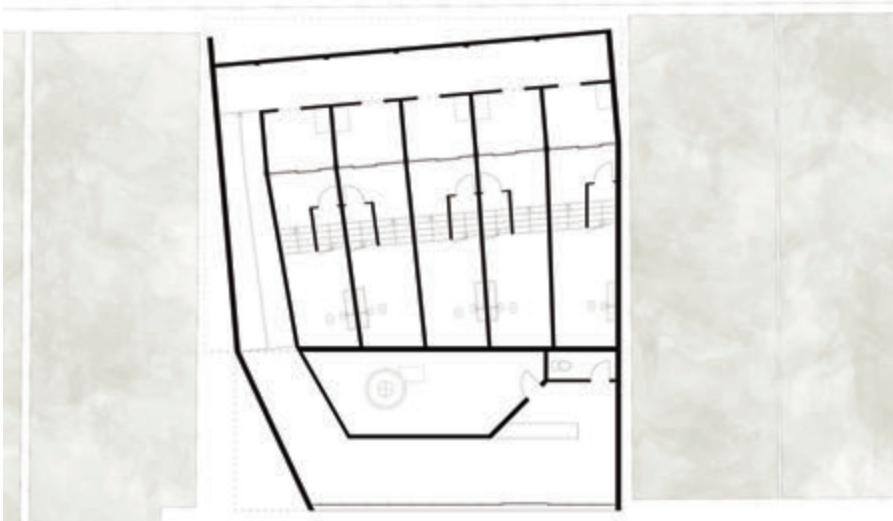


S I T E



四条通に面する敷地であり、表側にはアーケードがかかっている。烏丸通に面する建物は比較的高層であるが、敷地近辺はその中では低めの建物もみられる。四条通から逸れた通りに入ると人や音がぐっと少なくなり、物静かな裏手にも面する場所である。

P L A N



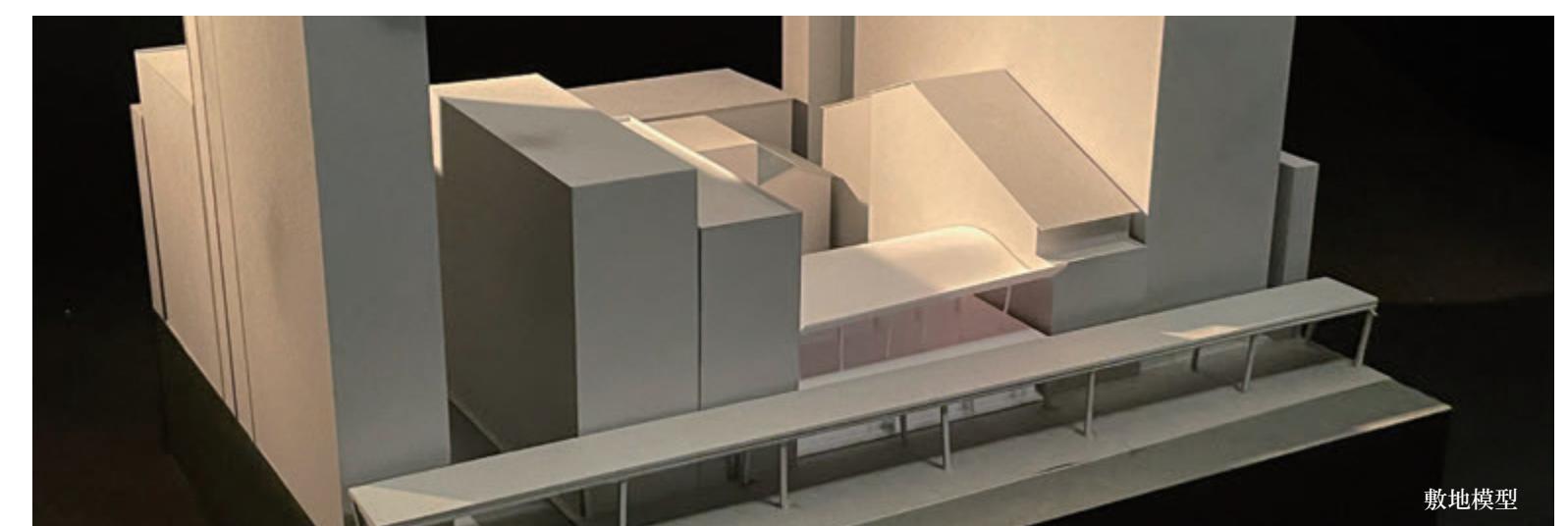
GL+1600 S=1/150



GL+5000 S=1/150



本模型



敷地模型

program 3

まちの中で、上を見上げれば「空」が広がる。常に変わりゆく気象がかたちとなってあらわれている。しかし、建物が密集する場所では空は小さく覆われ、もはやその存在を意識することもないのかもしれない。そっと「空」を見上げていると、時々刻々と変化する雲が風に流されている様子が感じられる。

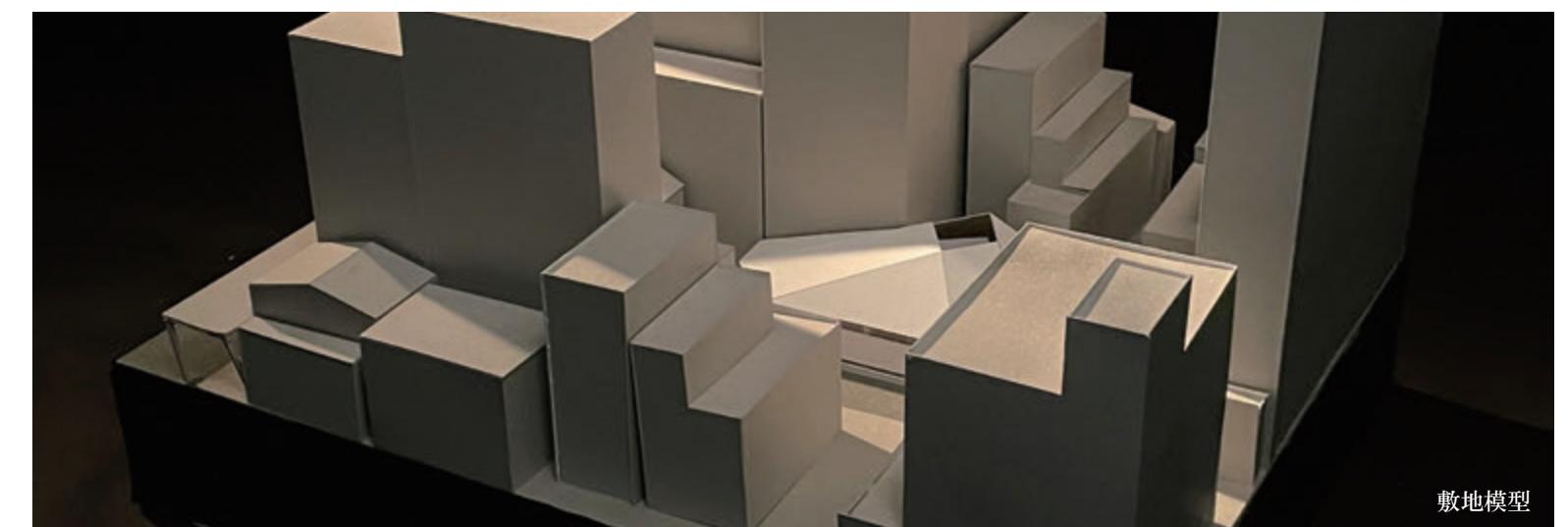
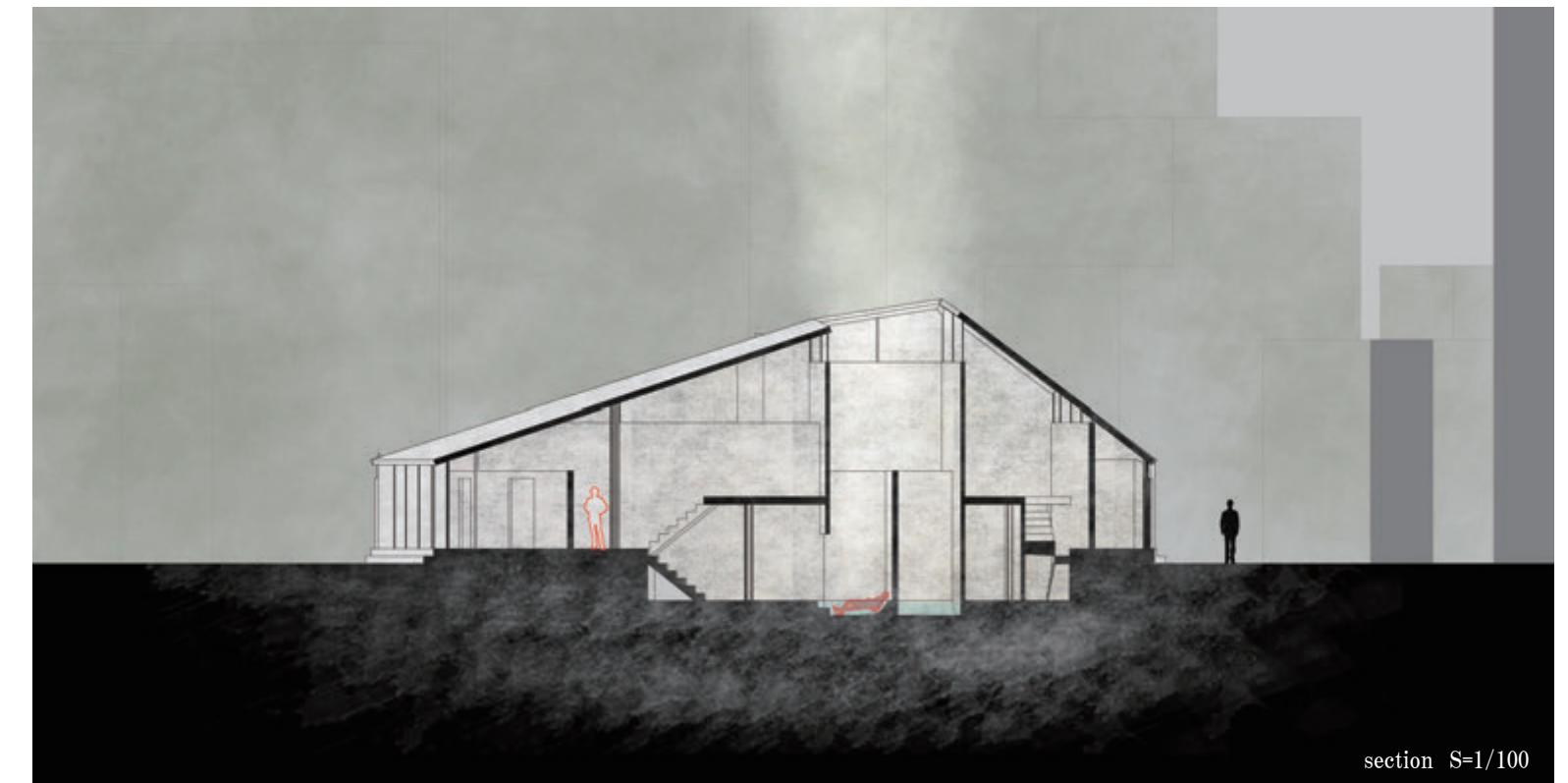


SITE



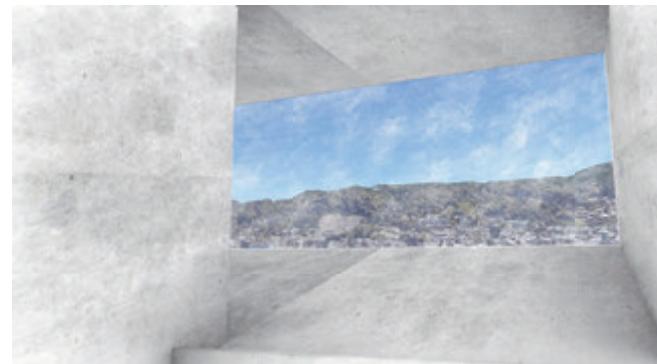
河原町通東側から入った路地の先にある四角い敷地。北側の細い路地、東の立誠ひろばへと抜ける通路、西側の河原町通のアーケードへと抜ける道と、三方向につながる場所である。周辺は高層の建物が並ぶも、その裏側に切り取られた空が見える。

PLAN



program 4

京都は言わずと知れた盆地であり、三方を「山」に囲まれる。寒暖差の激しい京都を作っているのがこの「山」であり、さかのぼればこの地に都が置かれたことにも由来するほどの存在である。通りから見える山が連なり、この京都を取り囲んでいることを感じる場である。

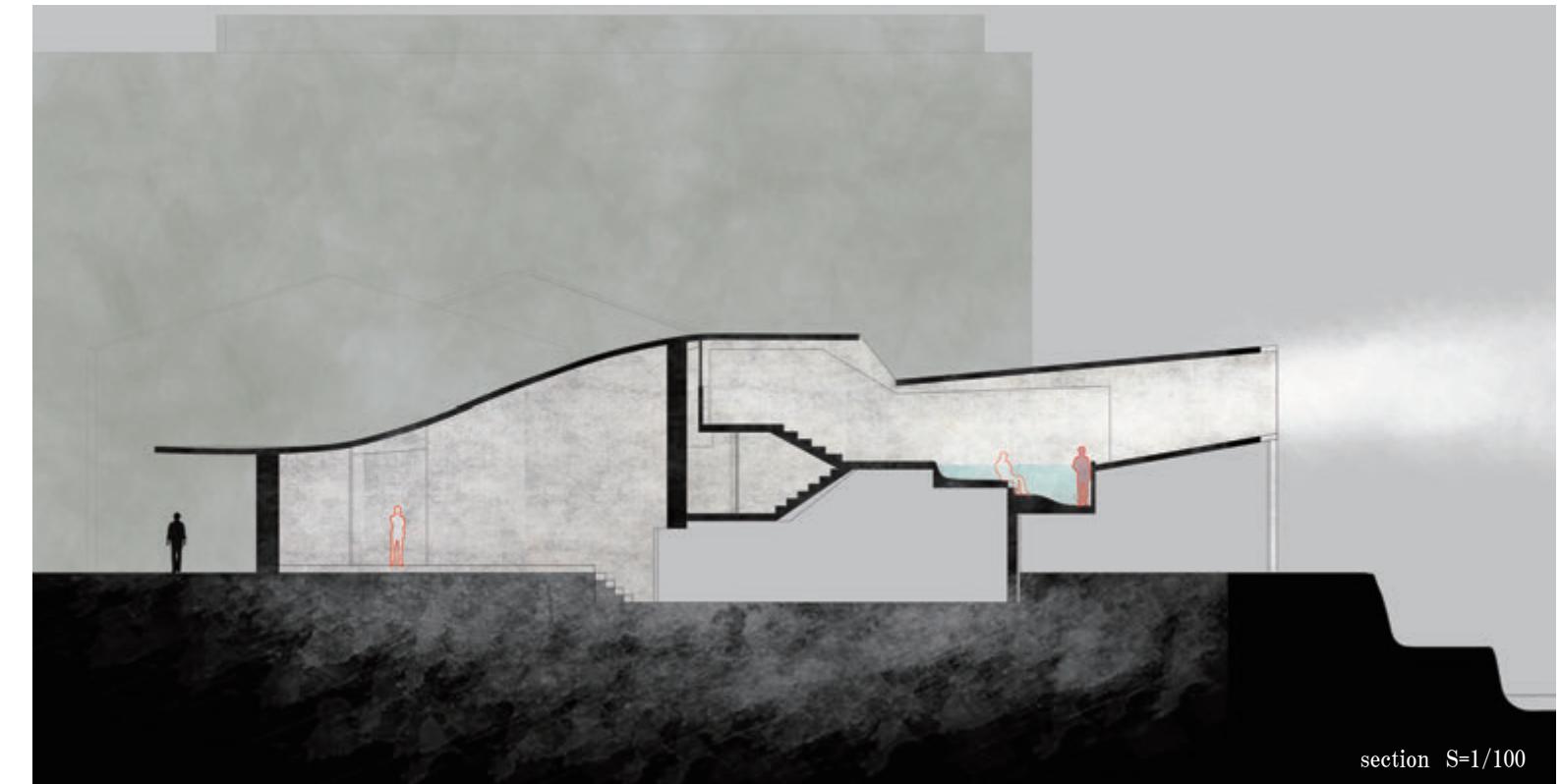


SITE

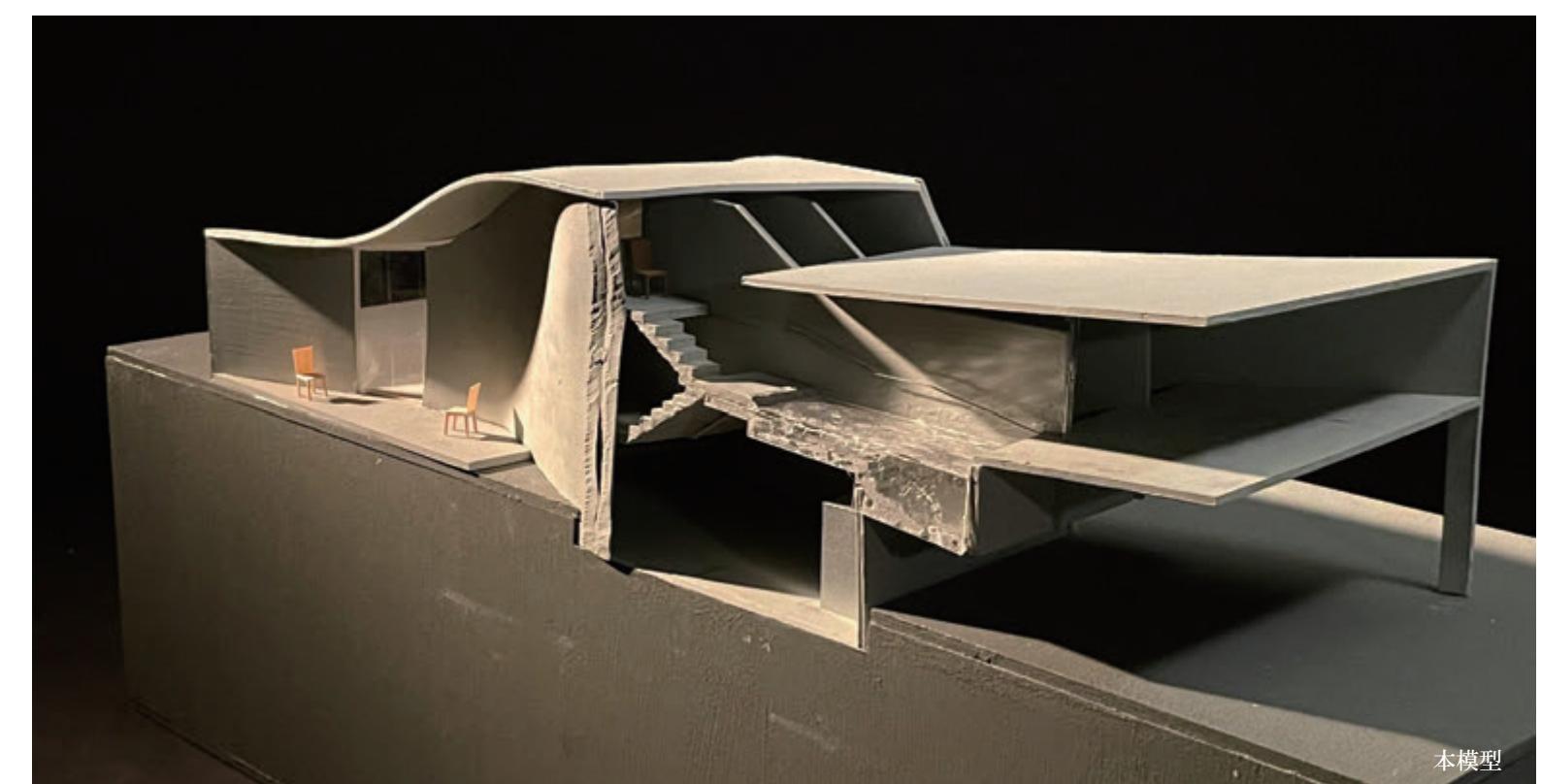


四条通から木屋町通を南に進んだところの東側にある敷地。周辺は低層の建物が並び、通りに沿った街路樹や高瀬川など、落ち着きのある場所である。鴨川に面する場であり、東に連なる東山まで視線が抜けるように細長くのびたかたちの敷地である。

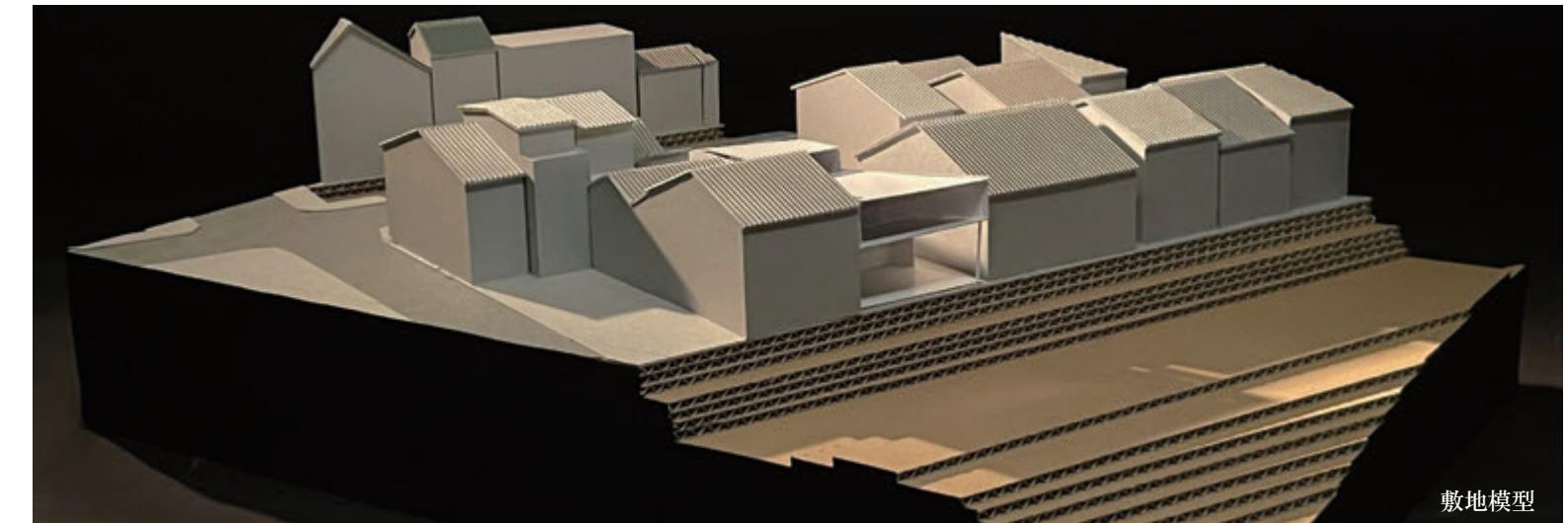
PLAN



section S=1/100



本模型



敷地模型